

今必要なコミュニケーション能力の育成方法の研究

—— 情報ツールの活用を通して ——

須田 幸年¹

生徒の現状として、コミュニケーションが価値観の近い者同士だけで行われるという閉鎖的な傾向があり、関わりが少ない相手ほど、無関心になりやすい特徴が挙げられている。そこで、生徒が高めるべきコミュニケーション能力を「他者に対する関心」と考え、生徒が主体的に活動に取り組めること、教師が学級の実情に合わせて活動を選択できること等の工夫を取り入れた、コミュニケーション能力育成のためのプログラムを作成した。

はじめに

平成23年の「コミュニケーション教育推進会議審議経過報告」（以下、「審議経過報告」）の中で、「子どもたちは、気の合う限られた集団の中でのみコミュニケーションをとる傾向」があることを指摘している。

また、私が担当していた学級内の生徒の姿を振り返ってみると、価値観が近い者同士だけの閉鎖的なコミュニケーションが目立ち、関わりが少ない相手の気持ちに無関心なまま過ごしてしまう様子が見られた。

そこで本研究では、生徒のコミュニケーションの実態を整理することを通して、今育成すべきコミュニケーション能力を焦点化し、その能力を高めるための育成方法を考案する。育成方法考案にあたり、生徒の生活と密接に関わる情報ツールの有効性や価値を、同時に探った。

研究の内容

1 研究の背景

(1) 生徒のコミュニケーションの実態

コミュニケーション能力に関連して、「国民生活白書」（内閣府 2007）では、核家族化・少子化・都市化などにより、社会全体で人間関係が希薄になっていることが示されている。また、先に述べたように「審議経過報告」の中では、子どもたちが、気の合う特定の集団内で、コミュニケーションをとる現状があることや、コミュニケーションをとっているつもりが、実際は、自分の思いを一方向的に伝えているにすぎない場合が多いことなどが示されている。さらに、保坂・岡村(1992)は、中学生の発達段階として、内面的な類似性を元に、集団が作られやすい時期であることを述べている。

これらのことから、中学生の集団においては、考え方や境遇など、価値観が近い者同士だけの閉鎖的なコミュニケーションが行われる傾向があり、関わりが少ない相手ほど、無関心になりやすいという課題があると考えられる。

(2) 情報ツールがコミュニケーションに及ぼす影響

近年、注目すべき社会の急激な変化として、スマートフォンやタブレットPCの普及があげられる。「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査」（総務省 2014）によれば、中高生のスマートフォン利用率は年々高まり、また、その中のほとんどの生徒は、コミュニケーションツールであるソーシャルネットワーキングサービス（以下SNS）を使用していることが明らかになっている。

また、スマートフォンやタブレットPCといった情報ツールは、生徒にとって、身近な存在であり、多機能であるにもかかわらず、使い方の説明を十分受けなくとも容易に使いこなせるという特性を持つ。

生徒にとって、価値観の近い者同士で行われるSNSによるコミュニケーションは、容易に使いこなせるという情報ツールの特性を、負の方向に作用させ、過剰なつながりを起こすことが考えられる。社会学者の土井(2014)によれば、SNSにより、「つながり過ぎる」ことが、価値観が近い者同士だけのコミュニケーションを過密にし、周囲に注意を払う余裕を失わせていることを指摘している。このことが、閉鎖的なコミュニケーションの機会を増やし、関わりが少ない相手ほど、無関心になりやすいという中学生の課題を助長していると考えられる。

2 今必要なコミュニケーション能力

コミュニケーション能力の捉え方は、「感情や意思を相手に伝えられる」「信頼関係を築いていける」「意思疎通ができる」など、様々である。「審議経過報告」では、今の生徒に求めるコミュニケーション能力を、「いろいろな価値観や、背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したこ

1 大磯町立大磯中学校

研究分野（今日的な教育課題研究 新しい情報ツールが児童・生徒に及ぼす影響に関する研究）

とのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ合意形成・課題解決する能力」と捉えている。

そして、そのコミュニケーション能力を学校教育において育むためには、「①自分とは異なる他者を認識し、理解すること。②他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考すること。③集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと。④対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと。などの要素で構成された機会や活動の場を、意図的・計画的に設定する必要がある」と述べている。

本研究では、「関わりが少ない相手ほど、無関心になりやすい」という中学生の課題と、それを軽減する上で、関連性の高い「①自分とは異なる他者を認識し、理解すること」に注目した。それらを踏まえ、育成すべきコミュニケーション能力を、価値観の異なる「他者に対する関心」とした。

3 コミュニケーション能力育成プログラムの開発

(1) 「他者に対する関心」を高めるには

本研究で目指すのは、関わりの少ない価値観の異なる他者に対し、進んで関心を持つようとする意識を高めることである。そのためには、他者の情報を多く持つことが必要である。

「プロフィール」や「気持ち」など、他者の情報を知り、自分との共通点や相違点を見出した時に、人は「納得」「共感」「興味」「発見」といった反応を示すと考える。この反応は、他者に対する関心が高まった生徒の具体的な姿でもある。そして、その反応を起こすためには、互いにやり取りする情報量を増やし、コミュニケーションにおける発信力・受信力を引き出すことが重要であると考えられる。

(2) 情報ツールの活用について

2014年文部科学省が公表した「学びのイノベーション事業実証研究報告書（概要）」によると、情報ツールを活用した授業は「意欲を高めること」に効果的であることが明らかになっている。そして、「子どものICT利活用能力に係る保護者の意識に関する調査報告書」（総務省 2014）によれば、「9割以上の保護者が、子どもの将来にとって、ICTの利活用が必要と認識」とある。

これらのことも含め、情報ツールは、生徒にとって影響の大きいものであり、期待も大きい。また、使い方の説明を十分受けなくとも、容易に使いこなせるという特性も持つ。これからの時代を生きる生徒にとって、情報ツールの活用は、コミュニケーション能力の育成においても、欠かせない視点であると考えられる。そこで、重要なことは、「活用するか」「活用しないか」という議論ではなく、「どう活用するか」である。本

研究で開発するプログラムでは、情報ツールの有効性や価値を踏まえ、「他者に対する関心」の育成につなげたい。

(3) プログラムの概要

価値観の異なる「他者に対する関心」を高めるために、「コミュニケーション能力育成プログラム」の開発を行う。このプログラムは、学級活動の時間に位置付ける。

中学校学習指導要領に示されている、学級活動の目標は、「学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」である。

「他者に対する関心」を育成することで、相手の状況や気持ちに気付きやすくなる。それが、「他者と関わろうとする意欲」になり、学級活動の目標とされる望ましい人間関係の形成につながると考える。

「他者に対する関心」を高めるために、開発したプログラムは、第1図のように、学級の実態に合わせて、活動を選択できるよう、「BASIC」「STANDARD」「TRY」といった三段階の構成になっている（第1図）。

身に付けさせたい力	学習活動
プログラムBASIC「自己紹介エクササイズ」	
人のプロフィールを知り、関心を示せるようにする 発信：自分の紹介が出来る 受信：相手がどんな人物か知れる	<ul style="list-style-type: none"> ・プロフィールを伝え合えるショートエクササイズを行う ＊学級の実態に合わせ、やりやすいエクササイズを行う
プログラムSTANDARD「画像に書き込む『モノ』の気持ち」	
人の気持ちに関心が持てるようにする 発信：自分の気持ちを伝えられる 受信：人の気持ちを受け入れられる	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な『モノ』の気持ちを想像し考える ・考えを班で共有する ・考えを班で分類する ・どう表現するか、意見をまとめる ・表現されたものをクラスで共有する
プログラムTRY「仲間をPRするCMづくり」	
その人らしさに関心を持てるようにする 発信：自分らしさを伝えられる 受信：その人らしさを認められる	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューで長所を伝えあう ・タブレットPCを活用しCMを作成する ・CMを視聴し、その人らしさをクラスで共有する

第1図 プログラムの概要

「プログラムBASIC」では、クラス開きなど、互いに初めて顔を合わせる生徒が多い学級において、プロフィールを伝え合い、互いを知り、関心を示せるようにする。具体的には、「質問ジャンケン」のように、多くの質問ができる機会を意図的に設定し、趣味や好きな食べ物、得意教科などを伝え合うことができるショートエクササイズを行う。ショートエクササイズであれば、互いに関心の高い情報を、短時間で多くやり取りでき、集中して取り組めるため、発信力と受信力が高まると考えた。

「プログラムSTANDARD」では、互いに、相手のプロフィールを把握できており、次の段階として、人の気持ちを理解する必要がある生徒が多い学級において、「人の気持ち」に関心が持てるようにする。具体的には、自分の気持ちを表現し、伝え合う活動を行う。

「プログラムTRY」では、互いに相手の気持ちに関心を示せる関係ができており、さらに、より良い関係づくりを目指そうとする生徒が多い学級において、特技や夢など、「その人らしさ」に関心を示せるようにする。具体的には、互いの長所をPRしながら、その人らしさを表現し合う活動を行う。録画・再生が手軽なタブレットPCの活用により、CMを作成する過程で、何度も自分を客観視し、修正していくことを通して、より伝わる自分CMになり、発信力が高まると考えた。また、CMという短い時間内で、ポイントをしぼったPRを考えさせることにより、その人らしさを数秒内で認識できる構造にすることから、受信力が高まると考えた。

4 検証授業の実際

(1) 生徒の実態

所属校の生徒は、小学校から学年のメンバーが変わらず、気軽に声を掛け合える関係がある。また、検証授業を実施した第2学年は、習い事、部活動、SNSなど、共通の目的でつながっている仲間との関わりが多く、そのつながりに意識を向け過ぎるあまり、関わりが少ない級友の気持ちに気が付かず、無関心なまま過ごしてしまう傾向が見受けられる。しかしクラス替えや、学校行事など、何かのきっかけで、これまでにない相手との新しい関わりができたとき、それに期待感や喜びを示す生徒は多い。そのため、全ての生徒が互いの気持ちに関心をもち合うことにより、関わりが広がり、学年全体で、より良い人間関係を形成できると考えた。

これらの理由から、「プログラムSTANDARD」を、本学年で行うこととした。

(2) 「プログラムSTANDARD」の工夫点

「プログラムSTANDARD」の「人の気持ちに関心が持てるようにする」というねらいを達成させるためには、互いの気持ちを、できるだけ多く伝え合う活動が必要である。そこで、発信力と受信力を高めるために、次の三つの工夫をした。

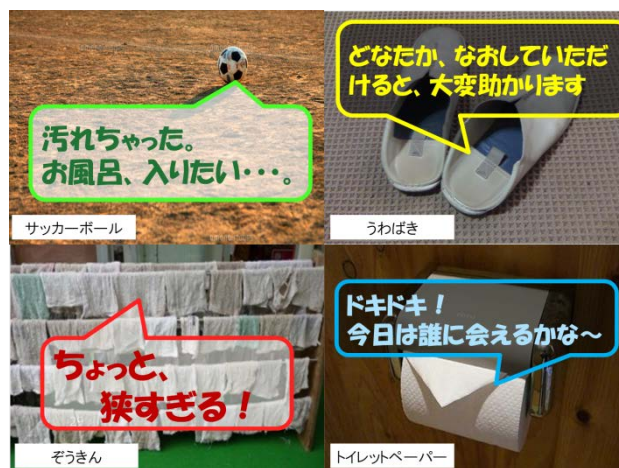
ア 身近な「モノ」の擬人化

自分の気持ちを伝えやすいように、身近な「モノ」を擬人化し、どんな気持ちでいるか、考える活動を設定した。これを取り入れた理由は次の二点である。

一点目は、生徒にとって慣れ親しんだ「身近なモノ」は、多くの生徒にとって関心が高いものであり、多角的で、多様な捉え方が出来ることから、発信力が高まると考えたからである。また、納得できる答えも多く、

気持ちを想像しやすいこと、表現された気持ちに関心をもちやすいことから、受信力の高まりにもつながると考えた。

二点目は、擬人化により「モノ」の気持ちを代弁するという表現方法であれば、人前で自分の気持ちを直接表現することに抵抗を示す生徒でも、発言しやすいため、発信力の高まりにつながると考えたからである。また、受け取る側は代弁した「モノ」の気持ちを、その人の考え方や気持ちとして受け取りやすく、受信力が高まると考えた。



第2図 身近な「モノ」の擬人化

イ 発想が広がる三つの班活動

他者の発想から、自分の発想を広げる学習活動を展開するために、「共有」「分類」「まとめ」という三つの班活動を設定した。

「共有」では、他者の発想を知るために、「モノ」の気持ちを、付箋紙に書いたものを伝え合う活動を行った。「分類」では、班で出た発想の共通点や相違点を見付けるために、付箋紙を分類する活動を行った。「まとめ」では、それぞれの発想の意味をより理解し合うために、「モノ」の気持ちをどう表現するのが最も適切か、班で考えながらまとめていく活動を行った。

三つの班活動を通し、生徒が、他者の発想を元に、新たな発想を生み出していく過程で、「納得」「共感」「興味」「発見」といった反応をおこし、より相手の発想を受け取りやすくなり、受信力の高まりにつながると考えた。また、新たな発想が生まれたことで、発信力の高まりにつながると考えた。

ウ タブレットPCの活用

班活動の「まとめ」の場面で、タブレットPCの画面に映し出された写真に直接「モノ」の気持ちを書き込みながら話し合うという活動を取り入れた。生徒にとって、身近なタブレットPCの活用は、自分たちで次々と使いこなせること、書き込んだり、消したりといった操作が、紙を使用したときより、素早く、綺麗にでき、多くの情報を効率的に示すことができることから、発信力の向上が期待できる。さらに、写真に直

接書き込み、言葉と重ね合わせた状態で確認でき、視覚的に捉えやすいことから、受信力の向上も期待できると考えた。

(3) 検証授業の概要

実施日：第1時 平成26年10月24日

第2時 平成26年10月28日

教科等：学級活動

対象：A中学校2学年 全4クラス 146名

活動名：画像に書き込む、「モノ」の気持ち

ねらい：身近な道具の気持ちを表現する活動を通して、互いの思いや考えを認め合い、人の気持ちに関心を持つことができる。

活動の流れ

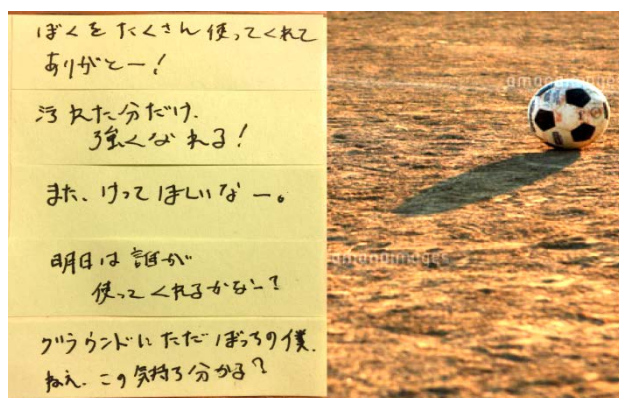
- 1【個人思考】身近な「モノ」の気持ちを個人で考え、付箋に書き出す。
- 2【班活動(1)共有】考えを伝え合う。
- 3【班活動(2)分類】班で出た発想の、共通点、相違点を見付ける。
- 4【第1時の振り返り】ねらいが実現できたかどうか、振り返り用紙の記入により振り返る。
- 5【班活動(3)まとめ】「モノ」の気持ちをどう表現するか、タブレットPCに書き込みながら意見をまとめ、できたものをスライドとして保存する。
- 6【クラス共有】各班で保存したスライドを再生し、クラスで見合う。
- 7【第1時、第2時の振り返り】ねらいが実現できたかどうか、振り返り用紙の記入により振り返る。

(4) 検証

検証は、主に授業中の生徒の様子、生徒振り返り用紙により行った。なお、「他者に対する関心」が高まったと判断する検証の視点は、相手の気持ちに対する「納得」「共感」「興味」「発見」を示した生徒の姿である。

ア 身近な「モノ」の擬人化の場面で

まず、提示された「モノ」の写真を見ながら、個人で「モノ」の気持ちを一つひとつ付箋に書き出させた。ほぼ全員の生徒が、考え込むことなく、5分間の中で、次々と書き出していた(第3図)。



第3図 付箋の記述の一例

そして、班活動(1)においては、一人ひとりが、積極的に付箋の内容を伝えており、聞いている側も「分かる、分かる」「なるほど」「ああ、そんな考えもあるんだね」などの声をあげていた。また、振り返り用紙には、以下のような記述が見られた。

生徒振り返り用紙より(抜粋)

- ①いつも身近にあるものだから、その気持ちを想像しやすく、たくさん書けた。
- ②「モノの気持ちだ」と言い訳できるので、恥ずかしくない。
- ③みんなの気持ちがよくあらわれていて面白かったので、ちゃんと受け入れることができた。

①の記述から、身近な「モノ」を使ったこと、また、②の記述から、擬人化を使ったことで、発信力が高まったことが分かる。③の記述から、擬人化が人の気持ちをよくあらわしていることから、相手の発想を受け取りやすく、受信力が高まったことが分かる。

イ 発想が広がる三つの班活動の場面で

個人で「モノ」の気持ちを付箋に書き出した後、4人でグループを作り、班活動を行った。

「共有」では、互いに付箋の内容を伝え合い、考えを共有する中で、新たな考えを思い付く生徒の姿も見られた。

「分類」でも、分類する作業の中で、発想の共通点や相違点に気付き、「え、自分の考えてそれと同じなんだ」「そういう分け方があるんだね」などの声が聞かれ、新たに考えを広げる姿も見られた。

「まとめ」では、前時で分類まで行った付箋用紙を基に話し合いながら、「それ、おもしろいね」など、互いに声を掛け合い、意欲的に話し合いを進めている姿が見られた。そして、振り返り用紙には、以下のような記述が見られ、互いの気持ちを、より理解し合う様子が見えた。

生徒振り返り用紙より(抜粋)

「班活動(1)共有」の場面で

①他の人の意見を取り入れ、新たに付箋を書くことが出来た。

「班活動(2)分類」の場面で

②分類しているとき、自分が思い付かないような発想で分けていた人がいたけど、面白い意見だったので、同意した。

③(意見を)聞いたことで、視野を広げられたと思うから。

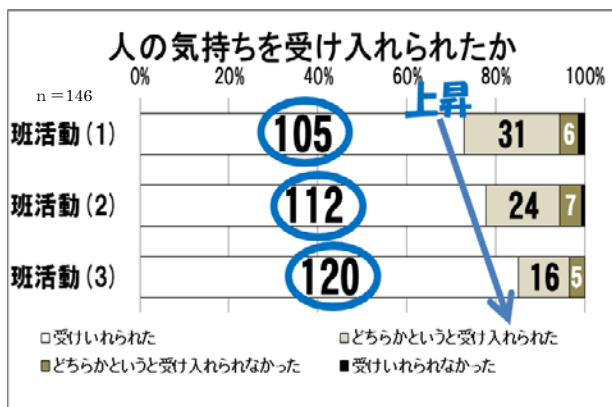
④書いた人によって、言葉が同じでも、うれしい系か、悲しい系か異なることが分かった。

「班活動(3)まとめ」の場面で

⑤(相手の)主張を理解し、活用できたと思うから。

⑥多数決でなく、しっかり理由を聞き、納得した上で決めた。

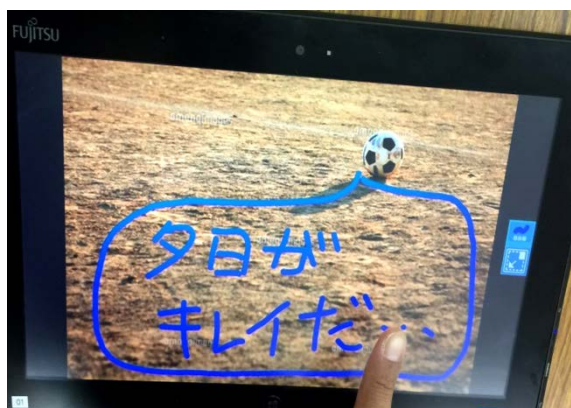
①～⑤の記述から、人の発想から、新たな「発見」をしたことが分かる。また、②、⑤、⑥の記述から、他の人の意見に「納得」し、また、②の記述から、「興味」を示しているのが分かり、「他者に対する関心」が高まったと考えられる。



第4図 振り返り用紙自己評価

また、「人の気持ちを受け入れられたか」という4段階の自己評価に対し、班活動(1)～(3)を通して、「受け入れられた」と回答した生徒が、徐々に増えていることが分かる(第4図)。これは、班活動で他者の発想を参考にしていく過程で、「納得」「共感」「興味」「発見」が生まれ、「人の気持ちを受け入れる」意識が徐々に高まった結果だと考えられる。

ウ タブレットPCの活用の中で



第5図 タブレットPCに書き込んだ様子の一例

班活動(3)において、配付した学校用タブレットPCを、生徒は初めて使用した。しかし、授業前の簡単な説明だけで自分たちで画像に映し出された「モノ」に、次々と書きこみながら、意見交換を活発に行っており、書き込みや表現の色使い、笑顔のスタンプなど、自分たちで使えそうだと判断した機能を使い、表現のバリエーションを増やししながら、取り組んでいる姿も見られ、発信力の高まりが感じられた。また、写真と言葉が重なったことで、「おお、本当に『モノ』がしゃべっているみたいだ」というような声も聞かれ、他者が表現したものを、興味深く確認する姿も見られたことから、受信力の向上につながったことも感じられた。また、振り返り用紙には、以下のような記述が

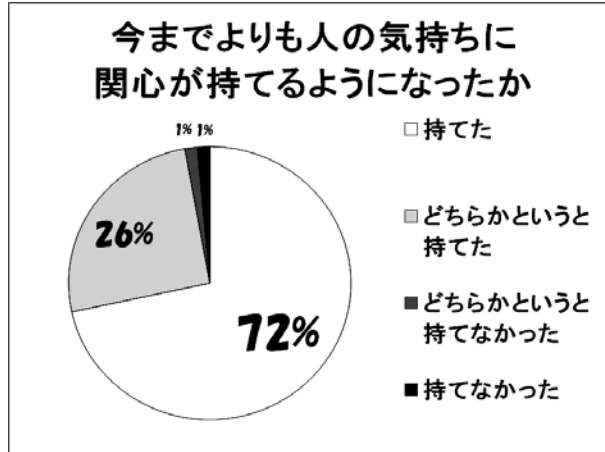
見られた。

生徒振り返り用紙より(抜粋)

- ①タブレットPCに書き込むことで、表現の幅が広がり、相手の気持ちが分かりやすかった。
- ②タブレットPCを使うことで、たくさん話し合えたことで、クラスみんなへの関心が高まった。
- ③タブレットPCを使って気持ちを表すのが楽しかった。表現されたみんなの言葉を見るのも楽しかった。

①の記述から、色や文字の太さ、スタンプなど、表現の幅が広がったことで、相手の気持ちが理解しやすく、「納得」や「発見」を示しているのが分かる。また、②、③の記述から、画像に気軽に多くの情報が次々と表されたことで、話合いが活発化し、他者への「興味」を示しているのが分かる。これらのことから、タブレットPCの活用により、やり取りする情報量が増えたこと、理解しやすかったことで、「他者に対する関心」の高まりにつながったことが考えられる。

(5) プログラムSTANDARDの有効性



第6図 生徒振り返り用紙自己評価

これまで述べてきたように、身近な「モノ」の擬人化、発想が広がる三つの班活動、タブレットPCの活用という三つの工夫により、「他者に対する関心」が高まったことが確認できた。そして、生徒の振り返り用紙の自己評価で、「今までよりも人の気持ちに関心が持てるようになったか」の質問に対し、「持てた」「どちらかという持てた」と答えた生徒が98%にのぼった(第6図)。さらに、振り返り用紙生徒感想からは、「他者に対する関心」の高まりによって、望ましい人間関係の形成につながる「他者と関わろうとする意欲」を感じさせる生徒もいた。

生徒振り返り用紙感想(抜粋)

- ①もっと人の気持ちが知りたくなった。
- ②相手と話すことに抵抗がなくなった。
- ③人としゃべるのが楽しくなった。
- ④授業をやってから、あの人は何を考えているんだろうと気になるようになった。

これらのことから、プログラムSTANDARDで取り入れた手立てが多くの生徒に有効であったと言える。

5 研究のまとめ

(1) 成果

本研究では、今の中学生に必要なコミュニケーション能力を、価値観の異なる「他者に対する関心」に焦点化し、育成方法を考えた。「他者に対する関心」を高めるために大切な視点は、「プロフィール」「気持ち」など、他者の情報を多く持つことである。検証を通し、生徒の発信力・受信力を引き出し、伝達を活発化させ、相手の情報を多く知ることができる工夫をすることで、生徒の中に「納得」「共感」「興味」「発見」という反応が生まれ、「他者に対する関心」が高まることが確認できた。さらに、検証後、他者に対する関心が高まったことで、それまで関わりが少なかった他者に対し、どんな人なのかと、情報を得ようとしたり、積極的に関わろうとしたりなどの変容を見せる生徒もいた。

スマートフォンやタブレットPCといった、情報ツールは、話合いの場面で、「書き込みながら話し合う」という活用方法により、発信力と受信力を向上させる効果があり、「他者に対する関心」を高める過程でも、有効であることが確認できた。

生徒の振り返り用紙の自己評価で、「今までよりも人の気持ちに関心が持てるようになったか」の質問に対し、「どちらかというとは持てなかった」「持てなかった」と解答した生徒は四人だった。そのうちの一人の生徒は、担任によると、「彼は人と関わることが苦手で、他者に関心を示すことはほとんど無い。しかし、タブレットPC活用場面では、積極的に自分の意見を伝えていた。」とコメントしている。このように、他者に無関心だった生徒が、情報ツールによって、他者と関わるきっかけを持てたことも、他者への関心につながる大切な成果だと考える。

(2) 今後の展望や課題

今の中学生には、価値観の異なる「他者に対する関心」が、望ましい人間関係を形成する上で、大切な要素であると考えられる。今回提案したプログラムSTANDARDに取り入れたような、生徒の発信力・受信力を引き出し、伝達を活発化させ、相手の情報をできるだけ多く知ることができる工夫を施した活動を、各教科、学級活動、行事など、様々な場面で、意図的・計画的に繰り返し行うとより効果的であると考えられる。

今後は情報化がさらに進み、授業の中で情報ツールを活用する場面が多くなる。そういったことから、生徒のコミュニケーション能力の育成にとって、有効にはたらく活用の仕方を考えていく必要がある。

おわりに

「関わりが少ない相手ほど、無関心になりやすい」という課題は、生徒だけのものではなく、我々大人にもあてはまる課題であると考えられる。生徒とともに、他者を知ること、関心を持つようとする意識を持ち、変わり続けようとする姿勢を、我々大人も持つことが大切である。そうすることで、社会全体として、他者に関心を示しあう関係が生まれ、より良い人間関係の形成につながるのではないだろうか。

引用文献

- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説特別活動編』 p. 25
- 文部科学省 2011 「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」（平成23年コミュニケーション教育推進会議審議経過報告）
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/30/1310607_1.pdf (2014. 10. 10取得))

参考文献

- 総務省 2014 「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査」
(<http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2014/internet-addiction.pdf> (2014. 10. 11取得))
- 総務省 2014 「子どものICT利活用能力に係る保護者の意識に関する調査報告書」
(<http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2014/2014children-ict.pdf> (2014. 7. 21取得))
- 内閣府 2007 「国民生活白書」
(http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/10_pdf/01_honpen/pdf/07sh_hajimeni.pdf (2014. 9. 3取得))
- 文部科学省 2014 「学びのイノベーション事業実証研究報告書」
(http://jouhouka.mext.go.jp/school/pdf/manabi_no_innovation_report_gaiyo.pdf (2014. 10. 26取得))
- 土井隆義 2014 『つながりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える』岩波ブックレット
- 保坂亨・岡村達也 1992 「キャンパス・エンカウンター・グループの意義とその実施上の試案」
(<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/AN00179512/KJ00004298925.pdf> (2014. 6. 4取得))